

マイケル・ワッツ著

『静かなる暴力——北部ナイジェリア  
における食糧、飢饉、小農——』

M. Watts, *Silent Violence: Food, Famine and Peasantry in Northern Nigeria*, バークレイ, University of California Press, 1983年, xxxi+689ページ

著者のワッツはイギリス生まれの地理学者で、ミシガン大学で博士号を取得し、現在カリフォルニア大学の地理学科の助教授となっている。彼の博士論文は、そのタイトル「静かなる革命」からもわかるように、本書の基礎となっている。この論文を完成させるため、ワッツは、1977年から78年にかけて北部ナイジェリアで現地調査を行なっている。最近では、アフリカにおける灌漑稲作の研究を始めつつある。現在、雑誌 *African Studies Review* の編集委員である。

## I 本書の内容

さっそく本書の内容について紹介しよう。まず本書の章別構成は以下のようになっている。

- 第1章 序：食糧と飢饉の政治経済学
- 第2章 19世紀のハウサランドとソコト回教国
- 第3章 19世紀の食糧、飢饉、気候
- 第4章 植民地期北部ナイジェリアにおける資本、国家、小農
- 第5章 飢饉、危機と世帯の安全
- 第6章 ハウサランドでの飢饉、1900～60年
- 第7章 1970年代の気候、飢饉、食糧不足
- 第8章 食糧、農業とオイルブーム、1970～80年

この章立てからもわかるように、著者は、北部ナイジェリアにおける食糧不足、飢饉問題を、19世紀から1980年に至るまでの長い期間にわたって論じている。

第1章では、本書が取り組むべき課題の提示と、調査地域、調査方法の概説が行なわれている。

著者は、飢饉は単に自然的・人口学的・技術的限界の反映ではなく、資本主義の発展から切り離すことのできないものである点を議論の出発点としている。したが

って、植民地時代の商品作物生産増大の影響、農村開発に対する国家の役割、あるいは接合理論にみられる外部の資本制生産様式に条件づけられた周辺部での内部的構造矛盾といった点が、重要な分析視点となることになる。このような視点に立って、本書では、北部ナイジェリアにおける資本主義の発展とそれに伴う食糧危機の形態と内容の変化が追究されている。ところで本書では飢饉を、多数の人びとが飢えを経験し、それが社会危機を惹起するまでに至った段階と定義し（13ページ）、このような社会危機に直面して小農が示す一連の対処行動を「飢饉行動様式」と呼んでいる。

第2章では、19世紀ハウサランドにおける社会構造とその経済的基盤の解明に力点が置かれている。そしてソコト回教国 (caliphate) の再生産のダイナミズムが描かれている。

19世紀ハウサランドでは、一部商人層がイスラム聖職者・教師層、役人と結びつき、血縁関係、親方子方制といった複雑な社会関係を通じ、また奴隷労働力利用や宗教的帰依心のうえに、巨大な商業組織を形成していた（64ページ）。しかしこの回教国の経済的基盤である農業生産はギダ (gida) と呼ばれる小農が基本的単位となって担っており、彼らは余剰労働力を、強制労働や地代の形で役人 (masu sarauta) をはじめとする支配階級に搾取されていた（68ページ）。地代の額や形態は、地域によって異なり、また総じてそれは低額であったが、社会構造を維持するためのシンボルとして重要な意味もっていたという。聖職者、役人、軍人を主体とする支配者層は、一方で私有地経営を行ない、他方で商人と連合して、長距離交易にも従事した。また彼らは、奴隷貿易禁止後、奴隷を使い、大農場経営を行なったりもした（74～79ページ）。しかしながら、支配階級への富の過度の集中は、相続法と俵約令の存在で阻害されていたという。

第3章では、19世紀の早魃の推定と、飢饉発生の実事の発掘がまず行なわれ、その後で、自然現象としての早魃が、社会現象としての飢饉へと展開してくる過程を明らかにしている。史料研究、詩、伝説、寓話からの類推、長老からのヒヤリングを用いて復原された早魃と飢饉の年代記は、厳しい早魃と飢饉の発現が強い相関をもって現われることを示している。しかしながら飢饉の発生は、ハウサランド内でも地域的に著しい変異がみられ、また社会単位レベルによっても異なることが示されている。各世帯は常時飢饉の危険性にさらされていると

言えるのに対し、村単位の飢饉は、4～5年に1回、より大きな地域単位の飢饉は、7～10年に1回の割合で起きているという(104ページ)。

小農は、旱魃に対処するため、生産の最大化よりは被害の最小化を望む農耕方式を採用し、社会関係では、贈与や互酬などの水平的関係や、親方子方制などの垂直的关系を利用して示されている(105～106ページ)。世帯内の蓄積を費消しつくすと「親方」への支援依頼→財産の売却、抵当入れ→短・長期の出稼ぎ、といった一連の飢饉行動をとるといふ。牧畜民の飢饉行動は、旱魃初期の井戸周辺放牧に始まり、定着の決断、家畜・資本財の切り売りへと展開する。最悪の場合、家畜の買い戻し資金を得るため、農耕民のもとに賃労働に出かける(143～145ページ)。

生存のための最低限の生産物と少しの余剰の占有をめぐって、このような水平的・垂直的社会関係(非市場メカニズム)が重要な機能を果たしている経済は、倫理的経済(moral economy)と言える(106～109ページ)。倫理的経済は、支配者が被支配者からの余剰の占有を確保し、社会関係を維持するための社会的経済的条件を示していると言えるが、それは同時に国家権力の限界性をも反映していると言える。

第4章から第6章までは、イギリスによる植民地支配下での、食糧不足の質的变化、小農の再生産構造の変化、新しい国家装置の出現、倫理的経済の侵蝕、その結果としての新しい階級関係と抗争の出現、などを分析している。

第4章では、徴税制度や植民地行政機構の再編、落花生や棉花などの商品作物生産拡大をとおして、北部ナイジェリアにおいて資本制生産様式が、どのように非資本制生産様式と接合したかを明らかにしている。

商品作物と輸入品の交易に進出した商業資本家は、労働力の徴用組織を支配している非資本家的支配階級と連合し、彼らの生産に間接的に関与することでその社会的経済的基盤を掘り崩しつつあった(172～181ページ)。資本制生産様式と直接接合することのなかった小農は、生産手段から完全に切り離されることはなかったが、商品作物生産の拡大、都市や鉱山への季節の出稼ぎなどにより、植民地以前の、経済外的諸関係の枠内での蓄積機能を徐々に喪失し、自立性を失いつつあった。このような資本制生産様式と非資本制生産様式との錯綜した接合の原因として、著者は、(1)長距離交易に基礎を置く商業資本の存在、(2)植民地政府の歳入不足、(3)法、秩序の確立の必要性、を掲げている(184ページ)。

第5章では、前章で明らかにした接合が、小農の食糧生産と危機に対する安全性にどのような変化をもたらしたかを分析している。

商品作物生産は、協同労働組織ガンドゥ(gandu)の弱体化、核家族(iyalai)の独立指向＝孤立化を強めたこと、またイスラム教の浸透による既婚女性のセクルーション(auren kulle)や婚資の急上昇(輸入衣服最低3着)などもガンドゥの崩壊を促進した(218～219ページ)。そして孤立化を遂げつつある核家族は、農産物価格の変動、価格制度の変更、商人との間の不等価交換、土地の分散化などにさらされ、危機に対する適応力を失いつつあった。倫理的経済の切り崩しである。前貸し制度による負債の増大(240ページ)、機械的な課税といった新しい重荷も小農にのしかかり、下層貧農の再生産の危機と、他方で一部農民の上向化がもたらされ、農民層分解が進展したと言う。

第6章では、小農の再生産の危機を、1914年、29年、43年の大飢饉を例に具体的に検討している。

1914年の飢饉がすでに植民地化以前の飢饉と性格を異にするものであることを、小農による商品生産の「内部化」によって説明している(293～297ページ)。すなわちこの飢饉から小農を救ったのが1910年代後半の落花生価格の高騰であり、小農は他の選択肢を持たずに、落花生栽培でこの危機を乗り越えたというのである。

大恐慌後の生産性増大、協同組合化、飢饉援助指針の確立、第2次大戦期の農産物価格維持、食糧流通統制、大戦後の農業機械化推進、協同組合化促進、品種改良キャンペーン、入植計画、そして1947年の落花生および棉花マーケティング・ボードの設立と、植民地政府は、各時代ごとに種々の政策を実施してきた。これらの政策をとおして植民地政府は、小農の他地域への流出、税の滞納、サボタージュ、治安の乱れの防止に腐心しつつも、徴税、貨幣の浸透を推進してきた。これが政府の財政的、政治的基盤である小農生産をより一層侵蝕するという矛盾を抱えていた。生産諸力の発展が停滞する一方で、生産関係のみが新しいものにとって代わられるなかで、小農のみが飢饉に直面していたとする。

第7章は、独立後、特に1970年代のナイジェリアの食糧不足と飢饉をカイタ(Kaita)地区での実態調査結果を交えて論じている。

カイタも含め北部ナイジェリアの農村社会は富農(manyan noma)と商人(madugu)から成る富裕層と、十分な自給能力を持つ中層農とマタラウタ(matalauta)

と呼ばれる貧農の3階層に分けることができる(404ページ)。この三つの階層は、平均家族数、穀物倉庫数、家畜数で明らかな階層性を示しており、食糧不足に対する対応の仕方にも違いがみられる。貧農は、食糧価格が最も高い収穫期の直前に高利貸しや商人から生活資金の前借りを行ない、農作物価格が最も安い収穫直後にその収穫物で借金を返済することが多い。これが貧農の極貧化のメカニズムである(446ページ)。さらに、農作業が最も必要とされる収穫期の前から貧農は栄養不足の状態にあることが多く、しかもこの時期出産が多い。著者はこの時期を再生産のすき間(hiatus)と呼んでいる(443ページ)。貧農がこのすき間を乗り切ることが容易ではないが、富農や家畜所有農は比較的容易に、かつ有利に乗り越えている。

商品生産は、両極化を促進する賃労働の出現、相続による土地の分散化・縮小化、商人との間の不等価交換、負債の増大をとおして、農民層分解を推し進めていることが示されている(452~456ページ)。

第8章は、原油がナイジェリア経済の支柱となった1970年代以降の食糧生産の変化を描いている。潤沢な石油関連税収を背景に、莫大な教育投資、インフラの整備、建設の推進、各種公社の設立などが推し進められた。これらの計画を推進するうえで必要不可欠な外国資本に対しては、投資の安全、インフラの整備、市場の確保が約束された。ナイジェリア人化政策が実施されたが、全般的に言ってナイジェリア人の資本参加は画期的に増加したとはいえない(478ページ)。都市やその近郊で、住宅、官舎の建設、道路建設、工業用地造成などが盛んに行なわれ、未熟練労働力を大量に必要とするこれらの工事は、農村部から多量の若年労働力を吸引した。

これらの急激な工業化、開発政策を実施する国家の機構は、機能性や統制力に欠けていたものの、石油収入を基礎に中央集権化を強めつつあった(182ページ)。そんななかで、高級官僚、商業資本家、政治家、一部の企業家は、政治的連合体(482ページ)とでも言えるものを形成していた。この連合体は、食糧生産に停滞がみられ、食糧不足といった事態に直面するや、各種の公社を新設し、それらを通じて、食糧の生産、貯蔵、分配への直接介入を強めた。このうち食糧生産に関係する国家による大規模灌漑計画では、食糧生産が計画どおりの成果を上げず、政府の介入は、もっぱら、食糧の輸入とその分配にかぎられるようになった。

小農は、大規模灌漑計画により他地域に強制移住させ

られるということはあるが、主体的に計画に参画するといったことはなく、常に埒外におかれていた。一部の進歩的農民は別として、ほとんどの小農は、このような急激な経済環境の変化のなかで、自然がもたらす危機に対する耐性を失いつつあった。このような状況のなかで、1970年代後半に入り石油輸出が停滞しはじめると、両極化による社会階層間の敵対が強まってきた。1980年に北部の大都市カノで起きたマルワ(Alhaji Mohammed Marawa)を指導者とする反物質主義的、反西洋主義的宗教運動も、このような文脈で理解すべきであると言う(508~510ページ)。

## II 本書の位置づけ

### — 二つの書評論文における —

さて次に、最近発表された二つの重要な研究レビュー論文を紹介し、それらのレビュー論文のなかで本書がどのように紹介されているか、換言すれば、今日のアフリカの食糧生産問題、飢饉問題研究のなかで本書がどのように位置づけられているのかについて見ておきたい。二つの研究レビュー論文とは、リチャーズ(P. Richards)著の「生態変化とアフリカの土地利用の政治学」(注1)と、ベリー(S. S. Berry)著の「アフリカにおける食糧危機と農業変容——書評論文——」(注2)である。

リチャーズの論文は、エコロジーとアフリカの農業生産方法の変化との関係に視点を据え、その研究史を明らかにしたものである。生物学的人口論、マルサス人口論から社会学的人口論、生命の再生産論的視点への展開といった研究史の流れ、また自然現象としての旱魃理解から社会の「耐旱性」から見た旱魃理解への発展といった研究史の流れを追うなかで、著者が一貫して主張しているのは、伝統的農法に対する既存の評価の誤りである。最近のアフリカ農業に対する過度に悲観的な評価は、このことの反映であるとしている。

後者の論文は、食糧危機をより明解な歴史的な分析視座のなかで位置づけるために、既存の社会科学研究成果をどのように理解すべきかを示そうとした書評論文である。このなかで著者は、現在のアフリカの食糧危機を分析する場合、経済的機会と資源へのアクセスをめぐる諸条件の変化といった視点が必要であると主張する。アフリカにおける商業的農業の発展は、権力、土地、労働力、余剰へのアクセスをめぐる多面的闘争のなかで実現されてきたと考える。したがって、農業の変容過程を概

念化するためには、農作業や家族共同体の多様性を十分に考慮に入れ、それらが商業化と農業構造変化によって、どのような変容を遂げるのかを詳細な事実で跡付けることが必要であると述べている。

これら両書評論文の研究視点には大きな違いがみられるが、アフリカの食糧不足問題の解明には、地域や社会の多様性を理解したうえで、商品作物生産の拡大、農業の近代化、国家の介入等を検討する必要があるとする認識では一致している。これら2論文のなかにおける本書の位置づけは、以下のようになっている。

リチャーズ論文のなかでは、ワッツの書は、生態的变化（特に早魃）に対する小農の対応の仕方に、どのような時代性が存在するかといった問題に関心をもつ文献として位置づけられている。しかし同時にリチャーズは、植民地支配の影響が地域によって多様な様相を示し一様ではないことに対し、ワッツの配慮が足りないことも指摘している。

ベリーは、ワッツの書が経済的・政治的圧力とりわけ植民地支配が、アフリカの自然環境や小農生産に対してどのような影響を与えたかを分析した書として位置づけている。ベリーは直接にワッツ批判は行っていないが、間接的に彼の一般化に対する疑問を呈している。一つは不正確な証拠でしかない生態的現象の過度の重用に対する批判であり、もう一つは、外部からもたらされた経済的・政治的圧力がアフリカ農民をして、早魃や森林破壊、土壌侵蝕といった自然現象としての危機に対する対処能力を失わせているとするワッツの議論の一面性に対する疑問である。

これら両論文におけるワッツの研究の位置づけおよび批判点については、評者も同様の感じを持っている。し

かし、文化人類学者リチャーズが批判するところの地域的多様性に対する配慮の欠如や、経済史家ベリーが示唆するところの過去の歴史の復原、特に生態的变化の復原にみせるワッツの強引さと言った批判点は、まさにワッツが既存の研究の限界を打ち破ろうとして敢えて一步踏み出した点そのものであり、書評者とワッツのどちらが正しいかは、今後の研究の発展を待つほかはないといえる。むしろ評者は、ワッツが、ナイジェリアといった国民経済の枠ではなく、また逆に一地方のモノグラフでもなく、旧ソコト回教国圏を研究対象とし、地域研究に歴史的視点を織り込むことにある程度成功していること、さらに、無文字社会の歴史を口誦伝承から掘り起こす作業を一方で行ない、ソコト回教国の政治機構を歴史学、政治学に学び、他方、換金作物の導入とその普及過程を経済史に学び、自らも地理学者として現地調査も行なうという学際的研究を1人でやり遂げたことに対して一定の評価が与えられるべきものと考えている。評者がこの本を書評のために取り上げた理由はここにある。

### III 問題点および疑問点

最後に、評者が本書を読んで感じた若干の問題点と疑問点を示しておきたい。これらの問題点のなかには、リチャーズやベリーが示した問題点と同質のものもある。

本書の目的は大きく分けて二つある。一つは、北部ナイジェリア社会（ハウサランド）の資本主義に対する対応の仕方を明らかにすることであり、いま一つは、その過程で小農が、彼らが本来持っていた危機対応能力をいかに喪失してきたかを解明することにあつた。この2点に絞って本書の結論を要約すれば下表のようにまとめられ

| 時期区分           | ソコト回教国<br>(19世紀)                    | 植民地期<br>(1900~60年)                                    | 1970年代以降  |
|----------------|-------------------------------------|---|---|
| 支配形態および資本主義的作用 | 国家による農民支配<br>(聖職者) 共生<br>(商業資本家) 役人 | 植民地政府 } 接合<br>商業資本家 }<br>伝統的支配者層 }<br>労働力支配<br>小農, 土地 | 外国資本<br>国家 }<br>(近代国家の高級役人) }<br>(政治家) } 政治的連合体<br>(商業資本家) }<br>企業家 |
| 危機対応能力         | 倫理的経済+飢饉行動様式                        | 倫理的経済の侵蝕<br>世帯の孤立化                                    | 倫理的経済の崩壊<br>危機対応能力喪失  |

よう。

ここで問題となるのは、著者が北部ナイジェリアにおける資本主義の作用について考察するなかで抽出した、各時代の支配形態や支配者層の相互関連が明確ではない点である。たとえば、植民地期に商品作物の買上げと輸入品の独占的販売を行っていた商業資本家が、植民地前の回教国で長距離交易を行っていた商業資本家とどのような関連をもつのか、また、労働力の徴用組織を支配しそのような商業資本家と連合しているところの非資本家的支配階級を、回教国における聖職者、役人の末裔と考えてよいのかどうか、明確な説明がみられない。同様の疑問は1970年代以降についても言える。国家装置を利用しつつ外国資本とジョイントを結ぶ政治的連合体、すなわち高級官僚、政治家、商業資本家、一部企業家などの支配者層が、植民地期の支配者層とどのような関連または断絶を示すのか明確ではない。

評者が本書を読んで理解し得た範囲では、著者は、回教国時代の聖職者・役人層が、植民地政府による保護強化を得て商業資本家と連合し、そのなかから今日の官僚、政治家、商業資本家、企業家から成る政治的連合体が生まれてきていると考えているようである。しかしこのような模式的な理解ではヒル (P. Hill) が以前論じたようなスルタン=エミール支配体制内部の矛盾<sup>(注3)</sup>や、1970年代に入り顕著になってきた、北部出身官僚、政治家、軍隊内部での「カドゥナ・マフィア」と呼ばれる北部ナショナリストと近代化論者との間の対立といった、ダイナミズムは理解できない。

第2の問題点は、リチャーズのワッツ批判とも合致するのであるが、ワッツの北部ナイジェリア理解が、彼の主張とは裏腹に、きわめて一面的である点があげられる。彼は、資本主義の作用に対する対応の仕方についても、倫理的経済の侵蝕と崩壊過程に関しても北部ナイジェリアで一様な展開を見せたわけではないと何度も力説している。しかしそのことを実証的に論述している箇所は少なく、地域的多様性に対する配慮は、単なるリップサービスに留まっている感がある。たとえば、ソコト回教国内部での政治的・宗教的中心地域と縁辺地域といった、基本的な地域区分すら示されていないのである。1980年代の宗教運動や北部における政治的対立 (NPN 対 P RP) の原因について、きわめて鋭い指摘を行なった (第8章) 著者が、それらの運動や対立が、なぜソコトではなく、カノ (80年) やカドゥナ (82年) で起きたのかといった点について、何らの説明も与えていないの

はこのためである。リチャーズの前掲書評論文に対しワッツは、リチャーズが個別主義、経験主義への傾斜を強めすぎていると批判している<sup>(注4)</sup>が、ここではワッツの性急な一般化が批判されなければならない。

次にいささか些細なことであるが、19世紀の早魃と飢饉の復原作業に関する疑問点を指摘しておきたい。これはペリーが提示した問題点と共通点をもつものである。著者は、飢饉が早魃ではなく天災や伝染病によっても起こりうること、また逆に、詩や伝説などで政治的危機として語り伝えられている事項が早魃に起因する飢饉と直接結びついている可能性があることなどを指摘している。しかし個々の事例についてどのように早魃、飢饉、天災、伝染病、政治変動などを識別・確認したのかが必ずしも明らかにされていない。19世紀における倫理的経済の存在形態や飢饉に際しての飢饉行動様式を検討するうえでも、早魃、天災、伝染病、飢饉、政治的危機の復原は基本的作業となるので、今少し分析手順を明らかにする必要があると考える。

最後に、本書にかぎらず、人間社会を生態との係わりなかで論じる際に避けておけない問題であるが、過去の人間の営為の結果としての植生や土壌、気候の変化 (それは現在を生きる人間にとっては自然的与件となって現われてくる) をどのように扱うかという問題が、本書では必ずしも明示されていない。本書では、過去と現在の早魃が同一の自然的与件と仮定されている。異なるのは、それに対する農耕方式であり、社会組織であるとされている。飢饉行動様式といった概念は、このような認識があって初めて可能である。しかし農耕方式や社会組織の変化は、やがて植生や土壌の変化をもたらし、その規模が大きい場合、気候をすら変えると言われている。この人間の自然に対する営為に起因する生態的变化を、人間社会の分析にどのように組み込むのかといった新しい問題意識はこの本には見られない。それはたとえば、アメリカのランドサット衛星が写し出したサハラ砂漠の南下を、本書の社会・経済的分析のなかにどのように反映させるかという問題でもある。環境決定論の桎梏から解放たれて久しい地理学をはじめとする人文科学は、今日、人間の営為による「自然」の変化と、その「自然」が人間社会に及ぼしている影響の検討といった新しい問題に取り組むべき段階にきているようである。

本書は、一部に内容の繰り返しや必ずしも必要ではない引用文の多用がみられ、読者に不要の忍耐を強いる面がある。しかしながら、今回のアフリカ諸国でみられる

食糧不足や飢餓問題を考える場合、本書は一読に値する研究書であるといえる。

(注1) Richards, Paul, "Ecological Change and the Politics of African Land Use," *African Studies Review*, 第26巻第2号, 1983年6月, 1~72ページ。

(注2) Berry, Sara S., "The Food Crisis and Agrarian Change in Africa: A Review Essay," *African Studies Review*, 第27巻第2号, 1984年6月, 59~112ページ。

(注3) Hill, P., *Population, Prosperity and Poverty: Rural Kano 1900 and 1970*, ロンドン, Cambridge University Press, 1977年。

(注4) Watts, M., " 'Good Try, Mr. Paul': Populism and the Politics of African Land Use," *African Studies Review*, 第26巻第2号, 1983年6月, 72~83ページ。

島田周平 (東北大学理学部助教授)